

令和2(2020)年度

京都大学経済学部
外国学校出身者特別選抜
試験問題

※問題は2問あります。

※解答は1問につき、1枚の解答用紙を使用すること。間違っ
て解答した場合は無効
となります。

第1問 次の文章は、山崎正和著『社交する人間 ホモ・ソシアビリス』（中公文庫、二〇

〇六年）からの抜粋である。この文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

好奇心はつねに生存の安全と快適を求める動物的な本能とは違って、ときに危険を冒しても未知に向かう人間独特の感覚だといえる。新しい満足のためにみずからの安全を賭け、ときに生活様式を変えることをもたれらわれない関心である。おそらく最初の物品の互酬はこの好奇心がもたらした冒険であり、「日常」の生存のための欲望とは無縁であったと想像するほかはない。ただし原始的な経済における日常とは、採集であれ農耕であれ生産のための共同作業と、それに続く産物の分配からなりたっていたであろう。そこにはすでに共同作業と分配のための秩序があり、その秩序を維持するための権力構造も成立していたにちがいない。この段階でもすでに分配をめぐる争いは見られ、その意味で利害の対立する個人の觀念すら芽生えていたかもしれない。しかしこの日常のなかにはまだ贈与や交換を欲する個人、名誉や利益の増大を求めて互酬を行う個人は存在しなかったと見るべきだろう。

なぜなら共同作業の従事者にとって、その産物は初めから彼らの共同の所有物であり、個人の潜在的な所有権は分配に先だって確立しているからである。ここでは問題は共同所有権の区分の立てかたにすぎず、贈与や交換の場合のような、すでに個人に属する所有権を移転するということは本質的に起りえない。^① もちろん原始的な社会にも慈善や親愛の感情はあったであろうから、それにもとづいて贈与に似た行為は行われたにちがいない。だがそれは今日の家族内部の金品の移動に近いものであり、実質的には贈与というより富の再分配と呼ぶべきものであっただろう。ひと言でいえば、厳密な贈与や交換が起こるにはまず物品を所有する個人が存在し、権利を移転するだけの自他の区別がなければならないのだが、原始的な共同生産の社会にはそうした自他の区別がありえなかったはずなのである。

想像するに、原始社会において自他の最初の区分は個人ではなく、まずは異なった共同体どうしのあいだで芽生えたにちがいない。共同生産の規模と活動範囲が拡大するにつれて、生活様式の異なる集落や部族どうしが思いがけず接触したとき、そこには対立の契機を含んだ異質性の自覚が生まれたはずである。とくに生産物の質が大きく異なる共同体、たとえば山の民と海の民が遭遇したような場合、彼らは恐怖と敵意をこめて互いを差別したかもしれない。しかしその反面、彼らが人間として抜きがたい本性を持っていたとすれば、やがてその敵意が最初の好奇心に変わったことは容易に考えられる。そしてその好奇心は互いにとつてもっともわかりやすい対象、それぞれの生産物にまず向けられたと考えるのが自然だろう。言語の理解や習慣の容認に先だって、まず目と手で触れられる物品への関心が交流の道を開いたと想像されるのである。

彼らは互いにみずからの生産物を見せあい、それが自分たちにとって価値ある品、いいか

えれば必需品であることを示しながら近づいたことだろう。やがて好奇心から彼らはいいての生産物に手を出したにちがいないが、しかしこれがただちに贈与や交換の始まりであったと見なすのは早計である。なぜならこの段階では二つの共同体のあいだにまだ共通の価値観は存在せず、したがって生産物は贈与や交換に値する物品ではなかったからである。注意すべきことは最初の物品のやりとりが起ったとき、その物品はそれぞれのあいて側にとつて必要なものでもなく、羨むべきものですらなかったという点である。じつさい山の民にとつて最初の海の魚は無価値なものであり、海の民にとつて山の茸きのこは異様なものでさえあっただろう。そこで根源的な物品のやりとりが発生したとすれば、その動機はいかなる種類の欲望でもなく、純粹な好奇心であったと考えるほかはないのである。

その意味でこの根源的な互酬はじつは実質的な物品の移転ではなく、他のあらゆる手段に先行するコミュニケーションの方法だったと見ることができる。ある日、先史人は異質な共同体の生産物におそろおそろ手を出し、思いがけなくその魅力に気づくという経験をしたのちにちがいない。彼らはその価値を認めてそれを享受したうえで、代わりに自分たちが尊重する生産物をさしだしてあいての反応を見たであろう。むしろその行為はまだ贈与にたいする感謝の表現というより、自分たちの価値観をあいてに認めさせようという試みだったにちがいない。それはみずからが他部族の趣味を受け入れた以上、あいてにもみずからの嗜好を理解させようという、いわば強い自尊心の表現だったと考えられる。その意味でこの物品の互酬は互いの文化的な誇りの応酬であり、さもなければ流血の闘争を交わすはずの両部族にとつて、それに準ずる代償行為だったといえるだろう。だがその結果としてもし両者が同一の産物に喜びを覚え、満足の基準を共有しえたとすれば、それはどんな言葉にもまさる相互理解の端緒になったのではないだろうか。

やがてこの互酬の反復が共通の価値観を安定させるにつれて、両部族にとつてかつては異様だった物品が必要品に変わり、最初の好奇心はしだいに経常的な欲望に変わって行ったと想像される。反復はまた相互の産物の価値比較を可能にし、等価交換の理念を生みだすとともに、自然環境の違いにもとづく分業の習慣も育てたことであろう。その反面、ときとして両部族の誇りの闘争が再燃したとき、あえてその等価交換を否定するかたちで贈与が行われ、それに応戦する意味で気前のよいお返しも行われただろう。ここで初めて人類は対立を前提にした交流を経験し、共同体のあいだに異質性を介した友好がありうることを学んだ。人間には完全な融合でも争いでもなく、その中間にいわば付かず離れずの関係がありうることに気づいたにちがいない。いいかえれば一般に人間には社交と呼ぶべき関係があることが知られたのだが、この発見を人類はまず二つの共同体のあいだで行った。そしてその後の長い時間のなかで、この関係はしだいに共同体の内部にも持ちこまれ、ついには一人一人の個人の

あいだにも成立したと考えられるのである。

問1 傍線部①「もちろん原始的な社会にも慈善や親愛の感情はあつたろうから、それにもとづいて贈与に似た行為は行われたにちがいない」の記述は、慈善や親愛にもとづいた行為は贈与の起源ではないと筆者が考えていることを示唆している。だとすれば、何にもとづいた行為が贈与の起源だと考えられるか、説明しなさい。

問2 傍線部②「その物品はそれぞれのあいだにとって必要なものでもなく、羨むべきものでもすらなかった」とあるが、その後、そのような物品の等価交換が行われるようになったのはなぜだと考えられるか、説明しなさい。

問3 問題文から、筆者は人間同士の「社交」の本質をどのように考えていることがうかがえるか、互酬との関連性に触れながら説明しなさい。

第2問 次の文章は、伊藤公一郎『データ分析の力 因果関係に迫る思考法』（光文社新書、2017年）からの抜粋である（ただし、一部改変している）。この文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

なぜデータから因果関係を導くのは難しいのか

なぜデータから因果関係を導くのはとても難しいのでしょうか？

本章では、この点について3つの具体例を用いて説明します。

1つ目は、企業で働く方の回線から考えたマーケティング戦略の例です。2つ目は、公的機関で働く方の目線から考えた政策形成の現場の例です。また、3つ目の例として教育に携わる機関で働く方の目線から考えた具体例を考えてみたいと思います。

例1：広告の影響でアイスクリームの売り上げが伸びた？

あなたはアイスクリームを売る企業のマーケティング部に所属しています。現在社内では、ウェブサイト上で広告を表示することによって今年夏のアイスクリームの売り上げを伸ばすことができないか、ということが検討されています。あなたは上司から、広告を出すと売り上げがどれだけ伸びるのかデータ分析をしてほしいと頼まれました。過去のデータを見てみると、次のことがわかりました。

2010年にあなたの会社では、あるアイスクリーム商品についてのウェブ広告を出しました。すると、広告を出さなかった2009年と比較して、2010年の売り上げは40%上がっていました。そのため、あなたは上司に対し以下のような報告をしました。

「このように、広告を出した影響により2010年の売り上げは2009年に比べて40%上がった、ということが分析からわかりました」

①さてここで、なぜあなたの結論が間違っている可能性があるのか考えてみてください。どんな可能性が考えられますか？

ここでの問題は、

「広告を出した → 広告の影響で売り上げが40%伸びた」

という広告から売り上げへの因果関係（英語では **Causal relationship**、もしくは **Causality** と呼びます）が、あなたのデータ分析結果から導けるかどうかです。

例2：電力価格が上昇した影響で節電が進んだ？

2つ目の例として、政策を実施する政策担当者の抱える課題について考えてみましょう。

あなたは経済産業省の職員で、来年夏の節電対策を考えています。今回のプロジェクトの目的は、電力の価格を上げるとどれだけの節電効果につながるのかについて上司に報告することです。その目的のため、あなたは過去の電力価格と電力消費量のデータを集めました。

データを見てみると次のことがわかりました。日本のある地域では2012年に電力価格の上昇がありました。仮に、2008年の電力1単位あたりの価格は20円、2012年の価格は25円としましょう。一方、消費量のデータを見ると、2012年の電力消費量は2008年と比較して1時間あたり5キロワットアワー下がっていました。そのため、上司に対し以下のような報告をしました。

「データを見ていただくとわかるように、5円の電力価格上昇による影響で、消費量が5キロワットアワー下がったことがわかりました。そのため、電力価格を上げれば大きな節電効果が得られると期待できます」

②さてここで、なぜあなたの結論が間違っている可能性があるのか考えてみてください。どんな可能性が考えられますか?

例3：海外留学をすると就職しやすくなる?

同じようなデータ分析の問題を、教育の例を使って見てみましょう。
先日、以下の新聞記事を目にしました。

「海外留学に力を入れているある大学の調査では、留学を経験した学生が、留学を経験しなかった学生よりも就職率が高いことがわかった。このデータ分析の結果から、留学経験は就職率を向上させるのであると大学は報告している」

留学を経験した学生が、留学を経験しなかった学生よりも就職率が高かったという記事の前半部分は、データが示している事実なのだと思います。しかし、その結果から、

「留学を経験する → 就職率が上がる」

③という因果関係を導くことはできるでしょうか?

問1 アイスクリームの売り上げ、電力消費、就職のそれぞれの例において次のことを答えなさい。

- (1) 比較されている結果は何であるかを3つの例すべてについて答えなさい。
- (2) その結果の違いを導いた原因だと推論されているものは何であるかを3つの例すべてについて答えなさい。

問2 下線部①②③で、推論された因果関係が間違っている可能性が示唆されている。下線部①②③のすべてについて他に考えられる因果関係を具体的な例をあげて説明しなさい。

問3 下線部③で疑問視されている因果関係の推論の間違いを回避し、正しく因果性を導くためにどのような調査をすればよいかを述べなさい。